

## 南九州古代史の展開

河 口 貞 徳

\*\*\*\*\*

1 クマソとハヤト ..... 113

2 ヒスイ文化と岩偶文化 ..... 115

3 南九州農耕文化の停滞 ..... 117

4 大隅の古墳 ..... 121

\*\*\*\*\*

## 1 クマソとハヤト

古代、わが国の西辺に大和朝廷にまつろわぬ種族としてクマソとハヤトがある。

クマソは説話的に記録された種族で、國の西辺にいた勇猛な人々とされているが、その実体はつかみにくい。日本書紀に「日向の襲」という記載があり、同じく書紀の神武天皇紀に「日向國の吾田邑」と出ているので、阿多・吾田は薩摩の古称であるが、この記載によって薩摩ももとは日向に含まれていたことがわかる。したがって熊襲の居住地は、日向から薩摩にわたる地域であった。クマソのクマは球磨川などのクマであり、ソは薩摩郡・阿蘇などのソであって、クマソの国はいまの熊本・宮崎・鹿児島の諸県にあたる。古代に九州南部の山地の多い地帯にあって中央の権力に屈せず、辺境に勢力をふるった種族であったと思われる。

熊襲の終末についてみると、神功皇后紀にみえる征討記事が最後であって、以後その名がみえない。景行紀や仲哀紀にみえる熊襲征討が文献的研究の結果5世紀の前半代のことであろう（井上貞光「国造制の成立」史学雑誌60～11昭26）とされていることから、熊襲は5世紀の前半までで、その姿を史上から消している。

5世紀以降になると熊襲に代って隼人の名があらわれる。ハヤは南方を意味し、勇捷をいい表わしている。隼人は南方の勇ましい人ということになる。大和朝廷では夷人雜類と同じく異民族とみられているが、その風俗・習慣・言語が異なっていたためであろう。

隼人はしばしば反乱を起こし、朝廷はその統治に頭をなやましていたようである。

海幸山幸の伝承は隼人も朝廷と同じ祖から出たものというわけで、隼人の民間伝承をとり入れ隼人の離反を精神的な面から防ぐためにつくられたもので、持統天皇紀に「沙門を大隅と阿多とに遣わして、仏教を伝えさせた」とあって教化につとめ、またことあるごとに官位を与えるなどして懐柔につとめる一方、統治体制を強化し、武器の生産を禁じ、あるいは桑原郡に豊前より移民させるなど隼人の順化を計った。

隼人は朝貢し、宮廷に留って番上警備や儀式などの奉仕を行なって服属の実をあげている。

このような情勢のなかで、早く中央文化に順化し隼人の社会に君臨したのが大隅の曾の君一族であって、隼人中の名家となり畿内型の高塚古墳を残すことになった。

しかし隼人社会の一般は風土に規制されて農耕生産が充分発展せず、小部族からなる部族社会の段階に停滞し、古来の埋葬法を固持してきた。

隼人の居住地についてみると、日向隼人・大隅隼人・阿多隼人・飯隼人・薩摩隼人などと呼ばれて今の宮崎県・鹿児島県にわたって居住していたもので、熊襲の居住地と一致している。5世紀を境として熊襲が史上から姿を消し、隼人がこれに代って現われているのは熊襲が滅亡して、隼人が新たに他地域から移入してきたものではなく、同一種族が中央の人々によって異なる呼び方をされたものといえる。考古学上の資料によても5世紀を境にしてその前後にさしたる变化はみられずまた、南方文化の移入というような遺物もみられない。これは喜田貞吉博士のいうように、中央の文化を受け入れなかつた時代と、これと交渉を生じ、その俗に化し、漢・韓の文化

にふれるようになった時代との差異とみることが正しい。

## 2 ヒスイ文化と岩偶文化

### I 市来式の文化

南九州の縄文時代後期後半に市来式の文化がある。市来式の直前の指宿式は南九州の山間部から鹿児島湾沿岸へかけてわりに狭い分布をもった文化である。この時期は南九州のアカホヤ（上部）堆積時代（ $4640 \pm 80$ 年）の終わり頃で、大変萎縮している。生活地域が山間部に偏し、鹿児島湾に面する遺跡でも貝塚をつくらず、海に背を向けた時代である。

市来式はこれと対象的に海岸地帯に分布し、ほとんど貝塚をのこしていて、外海に面する貝塚（市来貝塚）からは5cm位の骨製鈎と外洋魚の骨が発見されていて、海洋に進出したことを示している。遺跡の面からみても、その数は2倍に増加し、分布も著しく拡がって、北は熊本県水俣市・八代市・球磨郡・菊池郡・長崎県島原半島にみられ（小林久雄・人類学先史学講11巻）東は宮崎県宮崎市・串間市、南は鹿児島県屋久島・種子島まで分布している。交易圏はさらに広く、海上交通路の発達を示し、奄美大島（宇宿貝塚）・沖縄（浦添貝塚）において、〔注 鹿児島・名覇間650km、鹿児島～名古屋間に等しい〕陸上交通では、現在の熊本県・福岡県に達し、市来式の遺跡からはこの地域からもたらされた西平式土器や鐘ヶ崎式土器が共伴して出土している。

このような市来式文化の発展の原因は、外部の文化圏との交流を活発に行なったためと思われ、外に南九州の火山活動の終息という環境の変化もひとつの条件と思われる。しかし最も大きな要素は交通の発達、とくに航海技術の発達が市来式文化の発展をもたらしたものと思われる。

### II 上加世田遺跡の文化

市来式の交通技術の上に成立したのが上加世田式の文化である。上加世田遺跡は薩摩半島の南端に近い加世田市にあり、河岸段丘にできた縄文時代晚期初頭の大集会場遺跡である。

直径20mほどの円形の窪地で、中心部へなだらかに傾斜した摺鉢状の地形であった。

窪地の低い部分には、埋葬跡が數カ所あり、小さな自然礫群でおおわれていて、種子島の弥生時代の覆石墓を想像させた。

窪地内では盛んに会食が行なわれたものとみて、炭素のこびり付いた深鉢形土器が浅鉢の蓋をかぶせた状態で、いたる所に発見され、付近には木炭・灰・獸骨・石鏃などが散乱して、獲物の調理のあとをしのばせた。小ぶりのマリや皿形土器がその間にまじっているのは、食器として使用されたものであろう。

食物の中には「しい」などの木の実がでんぶん補給に用いられたことは、集会場東方の直径90cmの浅い円形皿形の貯蔵穴から、多量の木の実の炭化物が発見されたことで推測される。

またこの集会場には一面にヒスイの玉類・半製品・原石などが出土し、攻玉用の砥石も発見さ

れているので、ヒスイに加工する高度な技術が存在したことがわかる。遺跡から出土したヒスイの量は60個を越え、このようにヒスイだけを一遺跡から多量に出土した例は、原産地の新潟県付近でも知られていない。

今年の発掘では長さ13cmのヒスイ製磨製石斧まで発見され、本遺跡の特異な性格〔注 石斧を宝石でつくり呪具としての性格を与えたもので、ヒスイに深い愛好の念をもっていたことがわかる〕をさまざまと見せつけられた。

ヒスイは先史時代においてもきわめてまれな宝石で、その半透明な深緑色の光沢が、当時的人々に珍重されたものであろう。縄文時代中期にみられるヒスイの大珠は発見総数111個で、〔注 寺村光晴著「翡翠」による〕その大半が中部地方以北の遺跡で発見されている。これは新潟県糸魚川市青海町付近のヒスイの原石産地で製作され伝播したものとみられている。

縄文後・晩期になると大珠は姿を消し、小形の勾玉・丸玉などがつくられ、ヒスイ以外の石材も用いられている。ヒスイの供給が少なくなったためともいわれているが、むしろ新しい文化の性格の所産というべきであろう。

この時代の攻玉の方法は、ヒスイの漂礫を川や海から採取して、そのままみがいたものである。勾玉は石器時代勾玉と呼ばれて、弥生以後の三日月形のものとは形が異なっている。

上加世田遺跡出土の玉類は、全部ヒスイ製であり、管玉が主で勾玉・小玉がわずかに伴出する程度である。勾玉はコ字形で石器時代勾玉と異なり、むしろ弥生時代の勾玉に近い。

攻玉の方法も原石を分割するという困難な技術を駆使し、穿孔のむずかしい管玉の製作が中心となっている。

このように中部・関東地方などの玉作りの文化と比較して、玉の組み合せや攻玉の技術が異なることは、九州地方に別系統のよりすぐれた玉作りの文化があったことを示唆している。しかもこの玉の組み合せはのちの弥生時代の玉の組み合せによく似ていることが注意を引く。これを九州系ヒスイ文化と呼ぼう。

この文化は遠く中国地方までおよんでいる。大分県・山口県などの縄文晩期の遺跡から同種の勾玉が出土していることから証明できる。

九州系ヒスイ文化の存在は、ヒスイ文化だけでなく、すべての面で新しい文化の誕生が九州におとずれはじめたことを物語っている。このことは石器にも、他のすべての遺物からも読みとれることである。

集会場を特徴づける今ひとつは、土偶・岩偶・石棒などの出土である。窪地一面に発見された総数は30点を越えている。土偶・岩偶・石棒類は西日本では発見例がきわめて少なく、関東・東北がその本拠であるが、ことに縄文晩期の出土例は九州地方ではきわめてまれである。上加世田遺跡の岩偶・石棒は軽石で作られ、原石の軽石を大事に深鉢形土器に貯蔵された例も発見された。岩偶は15cm位から小さいものは6cm程のものもあり、赤く塗られたものもみられる。他の地域と異なって抽象化が進んでいるのが特色で、刻線によって頭部・胸部・脚部にわかれ、顔面は凹穴を彫り込んだだけである。岩偶には人間のほかにカエルやサルなどをあらわしたものも発見され

た。

石棒は大きさ13cm位から5cm位のもので、小円礫群の端に垂直に建てられたまま発見されたものがある。おそらく祭祀の具として用いられたものであろう。

土偶や岩偶・石棒などがひとつの遺跡内に同時にしかも多数配置された例はない。これは集会場の性格を案するカギであると同時に、縄文晩期の社会の精神生活を知る有力な手がかりとなる。土偶や岩偶・石棒などが単独に発見された例は多く、呪具・呪符としてみられてきたが、この遺跡では個々の呪具から集団的な神像として昇華したものであろう。男性神・女性神だけでなく動物靈も祭られた。

ここで発見された沢山のヒスイの玉は、おそらく集会場で行なわれた祭祀に用いられたものであろう。縄文時代の玉類は普通1個佩用する呪符とされているが、〔注 呪術的靈力を佩用者に付与するもの〕ここでは部族集団の祭祀の具として用いられたものようである。

このような遺構・遺物を通して、感ぜられることは、新しく発生してきた生産活動と、それから生じたゆとりと華麗な結実であり、一方では縄文的な伝統になづむ姿であって、これらがないまざった特殊な文化といえる。

### 3 南九州農耕文化の停滞

縄文晩期から弥生前期へかけて、南九州の文化はかなり高度な水準にあった。九州系ヒスイ文化をもった九州では農耕の可能性をはらみながら水田耕作への移行は全地域に熟していた。東支那海に面した熊本県斎藤山貝塚・鹿児島県高橋貝塚はこのような必然から生れた。あらゆる面で高橋貝塚の文化は、弥生初期の文化として高い文化水準を有するものであったことは、出土した遺物が証明している。（土器・石器・貝器・骨角器・玉類〔注 6個中1個はヒスイである〕）

しかし乍ら南九州では弥生時代中期へ移行するころから変化が起こった。それまでは土器文化の上でも北九州とつながりをもっていたのが、この時期から特殊な土器文化をもつようになってくる。この原因是背後にある生産状態にあったと思われる。南九州は地形風土が農耕に適せず、肥沃な平野にめぐまれず、全土を覆うジラスは水田耕作には不適であり、年毎に襲う台風などの悪条件のために、農耕生産にだけたよって生活をいとなむことは不可能であった。せっかく発展しかけた水稻耕作の技術も開花のよろこびを得ることができず、従来の狩猟や漁撈の成果にたよらざるを得なかつた。

鹿児島県西岸の吹上町入来遺跡は弥生時代の中期初頭の遺跡であるが、V字状の溝状遺構から、壺にたくわえられたしいの実の炭化物が多量に出土している。これなどは、米だけにたよることが出来なかつた食料事情を示すものといえよう。

弥生時代中期後半に南九州に広く行なわれた山ノ口式土器がある。これは九州西岸に発生した縄文系の脚台を有する壺形土器を母体として生れたものである。

山ノ口遺跡はこの文化の代表的なもので、鹿児島県肝属郡大根占町馬場にある。昭和33年12月に発掘を行なった。遺跡地は水田地帯の南端に当る海浜で、背後に肝属山地の北縁部がせまつた地域である。汀線より遺跡地まで約100m、県道に沿つた水田である。東西20m、南北10.5m、発掘面積130m<sup>2</sup>、地層は上から第1層 砂質の耕土 厚さ25~35cm 第2層 酸化鉄富化層 第4層 褐色土層 30~40cm 砂多い層 中間に点々と火山灰層を含む（第3層） 第5層 30~40cm 黄褐色砂層 第6層 30~40cm 褐色砂層（5層・6層はひとつと考えてよい） 第7層 火山灰層〔注 コラ、開聞岳の噴出物。紫色粒子細かでかたくかたまっている〕 5層・6層にはさまっている。第8層 砂鉄を含む海成砂層 地表より1m 基盤をなし土器はこの上に乗つた状態で出土する。当時の砂浜と思われる。

この砂浜面に直径3mの環状にならべられた軽石礫群とその周囲に壺形土器7個、甕形土器8個、計15個の完形土器、磨製石鏃11個、軽石製勾玉3個、其の他軽石加工品などが出土している。

また、環状配石東側から壺と甕のセットが出でている。凸帶文のある壺形土器と、平底の深鉢形の土器の他に6個の磨製石鏃も出土している。甕は北、壺は南に横だおしの状態で出土したが、本来は立っていたものと思われる。

壺は底近くに小孔をあけてあり、甕はすすぐ部分的に付着していた。東方はとくに意識して優れた土器を置き、石鏃を配したと思われる。

環状配石の東南には壺と甕のセットが置かれている。水田耕作によって溶脱した酸化鉄が甕に付着しており甕は北、壺は南に位置している。壺は底部近くに小孔をあけてあることも東側土器セットに一致している。甕形土器の片面だけに炭素の付着がみられた。

環状配石の北東には壺と甕のセットがある。例によって甕は北、壺は南に位置し、壺の下底部近くに孔があけられ、甕の一部には炭素が付着している。共に装飾の凸帶がみられない。

環状配石の東南には単独の甕が配置されている。

環状配石の北東4mには長頸壺と甕のセットが配置されている。このセットは壺は東、甕は西と他と異なっているが、横だおしになる際に移動したこととも考えられる。甕の炭素が明らかである。

環状配石の北々東2mから出土した単独の甕形土器がある。一部に炭素の付着がみられる。

環状配石の北西3mに配置された無文の壺形土器もある。周辺には開聞岳が噴出堆積したコラ層が明瞭にみられる。土器の上面にもコラの付着がみられ、遺構が形成された直後に開聞岳が噴出したことが証明された。

環状配石の北西約2mに甕が配置されている。甕の左側に炭素が付着しているのがみられ、右側は風食によって剝げ落ちていることがわかる。

環状配石の西側、配石に接して壺2個、甕1個のセットが配置されている。甕形土器を北に壺形土器を南にならべ、壺の付近に5個〔注 1個は中央の壺の下から出土〕の磨製石鏃が発見された。これらの土器は装飾帶のある優れた土器で、東側の土器に対応しており、鏃を伴なうことも同様で、東と西とに特別の配慮をしていることがわかる。

環状配石の東西から頁岩製の磨製石鎌が総計11個出土している。最大 $6.2 \times 3.3 \times 0.3$  cm, 最小 $3.1 \times 1.75 \times 0.25$  cm。

環状配石の南側、基盤砂層にややめりこんで軽石製勾玉が出土した。軽石製勾玉は表面を丹塗しており、完形3個、半欠1個である。特別にこの遺構で行なわれた行事のためつくられたものと思われる。

環状配石の東側から出土した刻線を施した軽石の自然礫がある。とくに東側を選んで配置されており、呪術的な意味をもつものであろう。

この他環状配石の周辺から木炭が数ヶ所から発見されており焚火の跡と思われる。また環状配石の北西1mから $54 \times 38 \times 26$  cmの扁平な安山岩の板石が発見されているが、これは立石であったと思われる。

軽石製岩偶は、砂鉄採掘中に出土したもので前記の遺構と同層位から出土したものである。小形岩偶は $26.5 \times 14.3 \times 8.0$  cm、頭髪を紐でたばねた状をあらわし、胸に小突起を彫り出して乳房を表現していて、女性であることがわかる。大形岩偶は、 $30.5 \times 17.2 \times 8.2$  cm、両耳の部分に孔を穿ってあるのが注意される。

これは滑車状耳飾を嵌した状態を表わしているもので、縄文時代の遺習ではなかろうか。

軽石製石棒もある。岩偶と同様砂鉄採掘中に発見されたものである。 $39.5 \times 22 \times 11.5$  cm、断面矩形であるが、縄文時代の石棒に類似している。

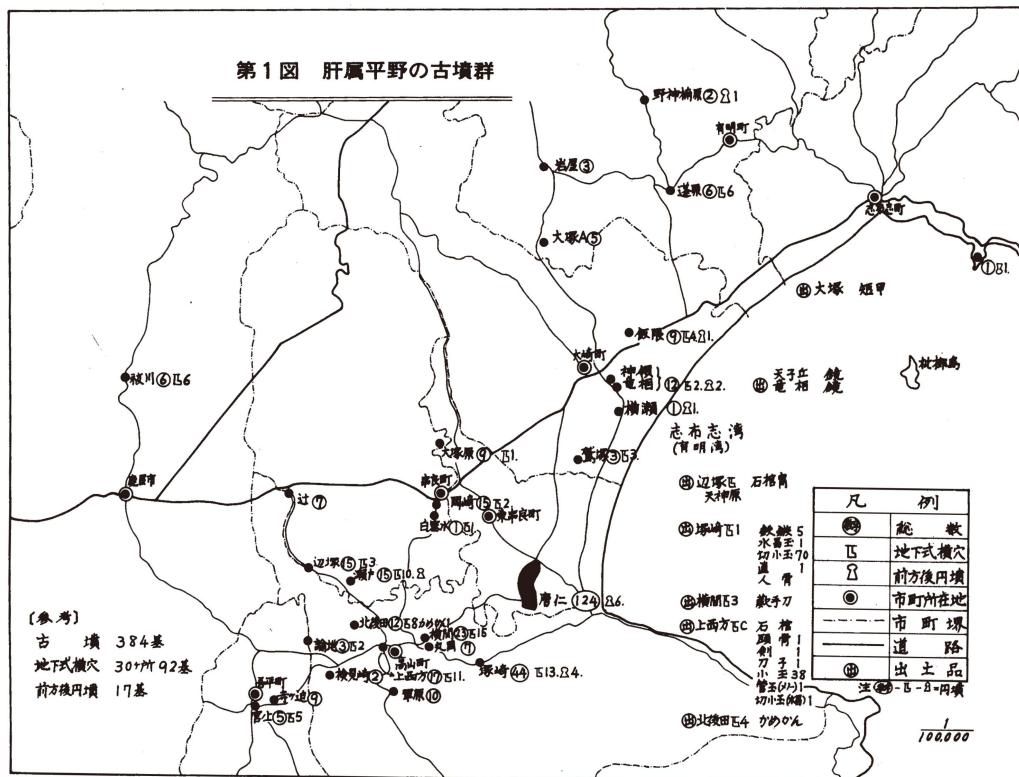
この遺跡はさらに35年4月第2次発掘を、36年5月第3次発掘を行なった。

第2次発掘では橢円形環状配石が発見された。軽石礫を $2.84 \times 1.6$  mに配石したもので、長軸の方向は略北西～南東方向である。周辺に甕形土器が4カ所に配置されている。北端の土器は赤色に塗られ研磨された美しい土器で移入された須歎式土器である。

また、平底の甕形土器が、橢円形配石の北西に配置されていた。

橢円形配石の北東30cmから出土した凹石がある。 $34 \times 24$  cm、軽石に加工したもので、同じく軽石に加工した蓋石2個で覆い、さらにスレートがかぶせてあった。石棒と対称的に女性を象徴するものであろう。

この遺跡は $20 \times 50$  mの地域につくられた環状配石の組み合せであって、北方平野部の人々の祭祀遺構であろうと思われるが、弥生時代にみられない種々の要素を多く含み、むしろ縄文晩期にみられる上加世田遺跡などにつながる面が多い。この地域ではなお農耕の一方で狩猟も盛んに行なわれ、その比重が大きかったために、縄文的な共同体社会の要素が強く残っていたものと思われる。



#### 4 大隅の古墳

古代に畿内に発生した古墳文化が南九州まで到達したのは5世紀の中頃であった。有明湾沿岸沖積平野の農耕生産力が吸引力となり、瀬戸内と九州東海岸の古代交通路がその文化をもたらした。記・紀にしるされた熊襲征討は5世紀前半の出来事とされ、景行天皇の巡幸の経路に沿って、5世紀代に成立した畿内型古墳が分布していることからみて、熊襲の服従とともに、南九州に権力社会が出現し、大隅はその南限となったものと思われる。

熊襲は5世紀半ばに史上から姿を消し、代って隼人が出現する。同一種族が中央文化に順化した姿が隼人といえよう。そのなかで、曾の君一族はいち早く中央に密着した隼人中の名家で、肝属平野を領して隼人社会に君臨したものと思われる。しかし隼人の社会は畿内などの単一な構造ではなく、孤立したきびしい環境によって規制された生活手段から、隼人の社会一般は小共同体からなる部族社会の段階に停滞していた。ことに有明湾沿岸は二重構造の明瞭な地域であった。

鹿児島県の古墳群は西岸の長島・阿久根にある若干を除くと、有明湾（志布志湾）沿岸と肝属川流域に集中している。先ず有明湾北端のダグリ岬には、自然の山地を利用した古い形の飯盛山古墳がある。これは県史にも記載された著名な前方後円墳であったが、今は国民宿舎ダグリ荘の敷地と化してしまった。もとは古墳の全長80m、表面に葺石があり、後円部には竪穴石室があった。ガラス製の勾玉・丸玉と壺形埴輪が採集されている。年代は5世紀中葉と推定され、本県で最も古い古墳である。

肝属平野の中央を流れる菱田川流域には、有明町野神（山神ノ上）・原田（大塚A）の古墳群と蓬原の地下式横穴群があり、その南の田原川の流域には、大崎町飯隈・神領・竜相・横瀬などの古墳群が略南北にならび、その西南方には最近驚塚の地下式横穴群が発見された。

横瀬の前方後円墳は全長129m、高さ15m、埴輪円筒と篦描文のある埴輪の橋がでている。後円部には竪穴石室があって古い形態をとどめている。水田面から崛起して形が優美で本県随一の美しい古墳である。昭和18年9月文化財として国の指定を受けた。

神領の天子丘古墳は全長40mの前方後円墳で、後円部に竪穴石室があり、「見日之光 長母相忘」の銘文のある前漢様式の内行花文鏡と、仿製獸帶鏡が副葬され、石室の両側にそれぞれ剣と刀が出土している。

有明湾南端に流れ込む肝属川流域には、東串良町に、北より大塚原古墳群（10基、内1基は地下式横穴）、岡崎（上馬場）古墳群（15基）、上小原（瀬戸）古墳群（15基、内1基は前方後円墳）などがあり、河口に近い東串良町の唐仁古墳群は総数124基（内6基は前方後円墳、指定時は132基）の多数におよぶ。なかでも1号の大塚は本県最大の柄鏡式前方後円墳で、全長230m、高さ10.9m、後円部は周溝をめぐらしている。被葬者は隼人の最高支配者であったろう。後円部は削平して大塚神社を建て、渡り廊下の下に竪穴石室の蓋石5個が露出している。石室内には舟形石棺が納められ、その端に近く短甲が置かれているという。他に拝殿の下に組合せ石棺が露出

し、蓋石は除かれ、内部に石枕が残存している。凝灰岩製の上面にくぼみをつけたのみの粗末なものである。西日本に多く、後期まで続く型式である。渡り廊下の下の舟形石棺は古い型式であり、短甲を伴っている点からいえる。5世紀後半に位置するものであろう。これに引き換え坪殿下の組合せ石棺はやや時代が下り、後の寄生墳であろう。唐仁古墳群は昭和9年1月文化財として国の指定を受けている。

肝属平野の南縁には塚崎古墳群44基（内前方後円墳4基）がある。昭和20年2月、国の文化財に指定されている。この付近に辺塚古墳群15基（内横穴3基）〔注　この中に天神原古墳・今市古墳（前方後円墳2基）等がある〕宮ノ上古墳群（横穴5基），辻古墳群（7基），軍原古墳群（10基），上西方古墳群（5基），西横間古墳群（8基），丸岡古墳群（7基），北後田古墳群（4基）などの小古墳群が密集し、その間に地下式横穴群も入れまざって一大古墳地帯を形成している。

大和朝廷の行政組織をみると、三世紀後半から5世紀にかけては県制が行なわれ、6・7世紀になると國造制が地方支配の体制となっている。したがって九州における5世紀代の畿内型古墳は、県または県主が文献に現れる地域と、かさなる筈である。日向・薩摩について県・県主の記載をみると、景行紀に日向の諸・子湯があり、正税帳に薩摩の会・加士伎がみられるが、宮崎県諸県郡・児湯郡は5世紀代の畿内型古墳の分布地であって、5世紀代にこの地が大和朝廷の支配体制内に入ったことを示している。日向諸県牛諸井の女髪長姫は應神13年に仁徳の妃になっている〔注　小田富士雄日本の考古学IVによる〕ので、この点からみても大和朝廷との関係が明らかである。

大隅地域も5世紀から畿内型古墳が出現することは前述のとおりであるから、大和朝廷と服属関係ができたことはあきらかである。大隅では曰佐（通訳）が仁徳朝に国造に任じられたことが「国造本紀」にあることからみて、畿内文化に通じた大隅地域の族長が勢力を得て国造に任じられたものと思われる。大隅地方で古代の名族に曾君一族があったことは、記録にあきらかで、これらの族長は歴代叙位を受け大隅・曾於地方によって、肝属平野の隼人社会に君臨したものであろう。大隅地方の古墳はこれら曾君一族の祖先の墳墓である。

この地域には畿内型の古墳の他に地下式横穴と称する南九州独自の墳墓がある。大隅地域では高塚古墳と併存しているが、性格の異なるもので、隼人族本来の埋葬法であったと思われる。構造は地表から2～3mの堅坑を掘り、さらに横に水平に抜け羨道と墓室を構築するもので、墓室の天井は切妻・四注の屋根形をなすものと、ドーム状のものとがある。前者は古い型式で後者はより後代のものである。大隅地方では墓室内に軽石製の組合せ石棺を納めたものがあるが、切妻・四注屋根形の墓室にかぎられている。

墓室に通ずる短い羨道に土塊・礫・軽石などを詰め、あるいは板石でふさぎ、堅坑には土を埋めて地表には一切の標識を残さない。

分布をみると、単独に存在するものではなく、群をなしていて、その数はほとんど2桁を示している。

鹿屋市祇川で発見された地下式横穴からは、衡角付冑・横矧鉄留式短甲や成川式土器の伝統の強い土師器が出土しており、5世紀代のものとみられるところから、この地方に高塚古墳が伝播する以前からこの墓制が成立していたことを示している。

有明湾沿岸では曾於郡内に7カ所16基以上がしられ、大崎町竜相では墓室内に24個の軽石ブロックでつくられた組合石棺が納められ、副葬品には長剣1、骨製簪1、イモ貝製貝釧2、漢様式の仿製内行花文鏡1が出土している。おそらく5世紀後半のものであろう。

肝属平野南縁の串良・高山の地域は前述のように高塚古墳の発達の著しい地域であるが、地下式横穴群も濃密に分布し、現在総数30カ所92基以上を数える。この中で高山町大字前田字上原、後藤氏宅地から軽石製長さ2m、幅51cm、高さ50cmを有する組合せ石棺を納めた地下式横穴は、副葬品に蛇行鉄劍1と刀子3、イモ貝製貝釧2、骨製簪1が出土し、5世紀末から6世紀前半のものとみられる。同じく新富東横間、西村氏宅地発見の地下式横穴2号の副葬品には蕨手刀があり、この埋葬形式の終末紀が8世紀頃であることを示している。

分布は西にのびて、吾平町論地、宮ノ上吾平小学校、下名天神原を経て鹿屋市祇川におよんでいる。吾平小学校では、最近も数基が発見され、そのうちの1基には墓室の壁に線刻を施した壁画を有するものが発見された。この種墓室中の唯ひとつの例である。

祇川の地下式横穴群からは前記の衡角付冑、短甲、土師器の他に大刀1、剣2、土師器壇1などが出土している。

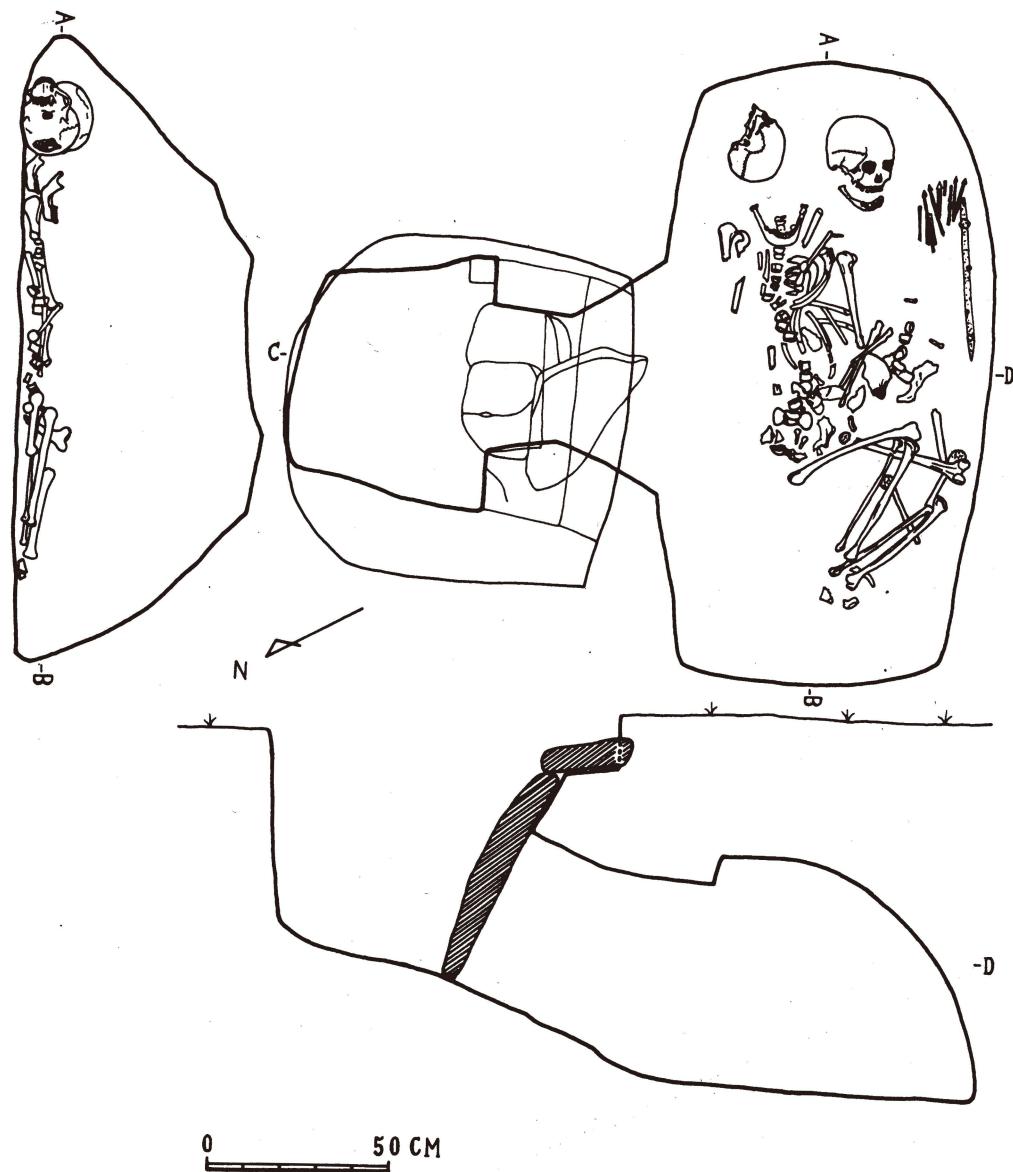
以上にみてきたとおり地下式横穴の副葬品は畿内型の高塚古墳となんら異なるところはない。しかしその墓制はまったく異質のものである。これは日向・大隅の地にのみ存在するもので、日向隼人・大隅隼人に伝來した個有の埋葬法であったろう。

このようにまったく性質の異なる古墳の形式が、ほぼ同一時期に、同じ地域にいとなまれたということは不思議であり、不可解な問題で、古代史の「なぞ」という外はない。

この「なぞ」を解くひとつの考え方は、中央に発生した権力社会が従来の共同体社会に、どのような経過をたどって浸透していったかという角度でとらえることである。

大隅の古墳地帯は、このような「社会変革」の様相をそのまま凍結した形で残された、非常にまれな例であると思われる。これを解くには、先ず古墳を発生させた背景の社会即ち古代の集落を明らかにし、これと関連させて古墳のあり方を解きあかさなければならない。

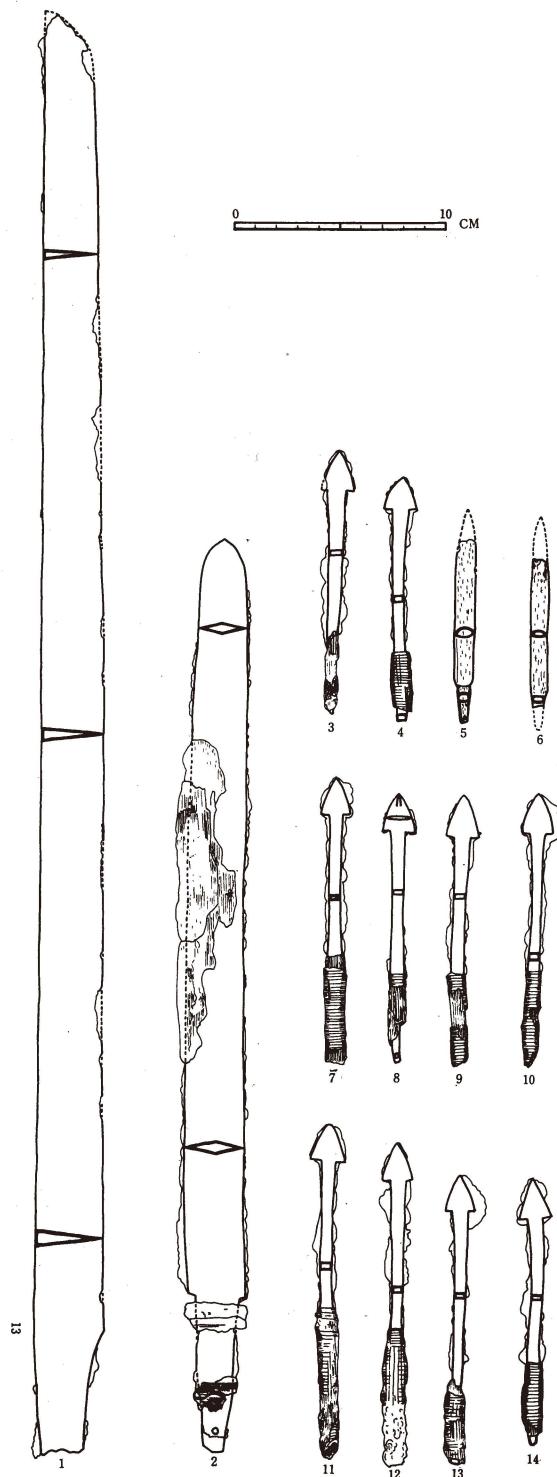
そのためには古墳だけの保存でなく、古墳を生みだした環境と共に保存することが前提条件となる。



## 第2図 一号墳

地下式横穴（7世紀）

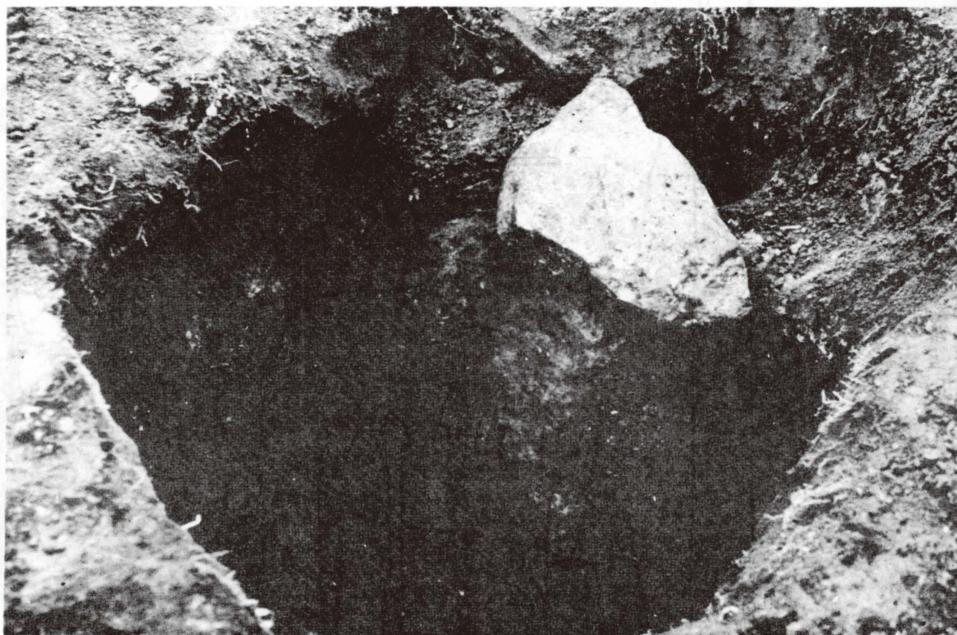
栗野町北方 中に埋葬人骨2体が届葬されていた



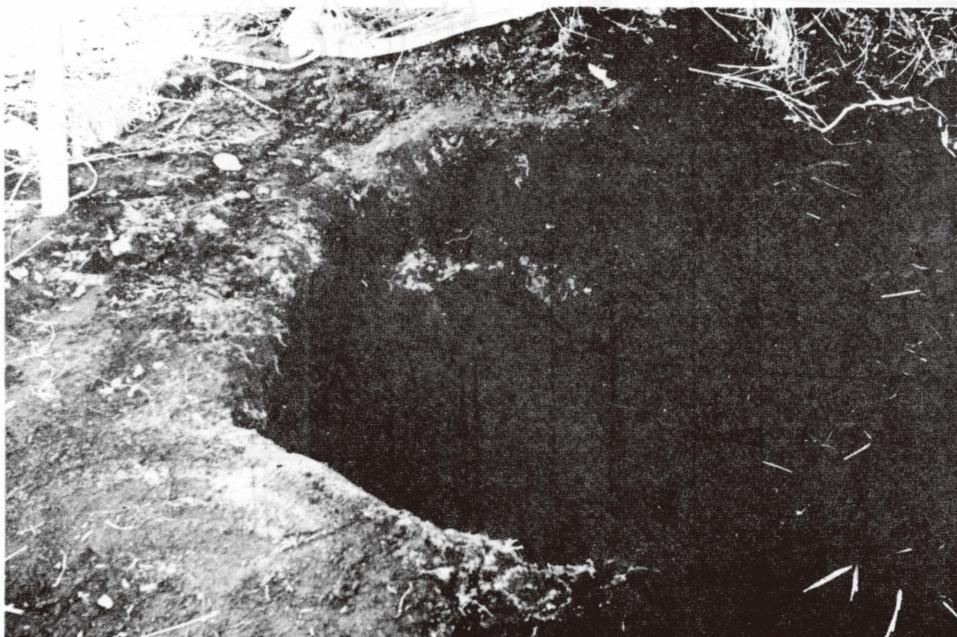
第3図 北方古墳出土遺物

北方の地下式槻穴に副葬された剣と鐵である。  
うち2個は青銅であった。

## 第 4 図



地下式横穴 栗野北方 7世紀 玄室入口を3枚の自然石で蓋をしている。



地下式横穴 栗野北方 7世紀 蓋を除いたところ、玄室に埋葬した人骨2体の一部がみえる。鉄剣と鉄鎌が副葬されていた。

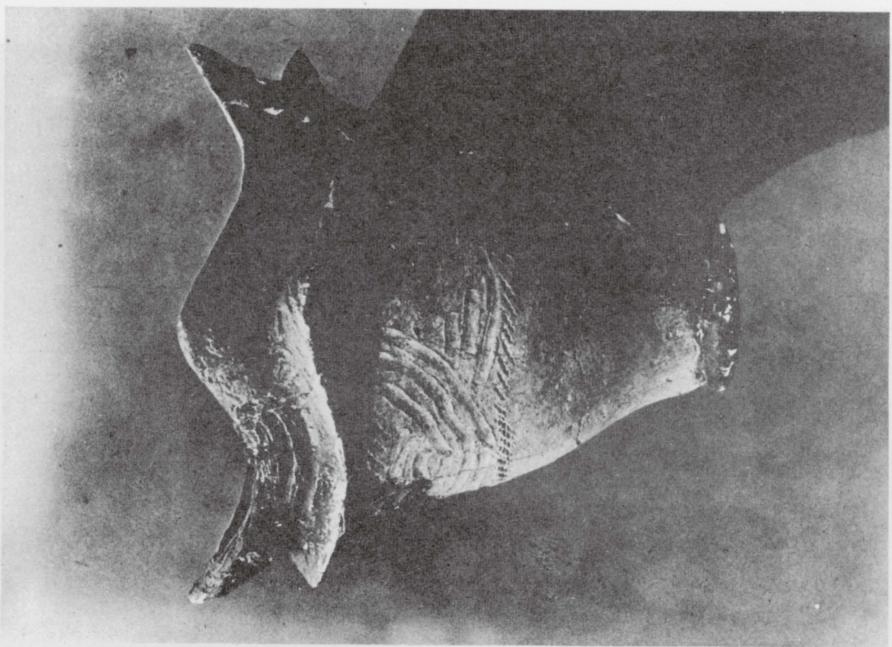
図

5

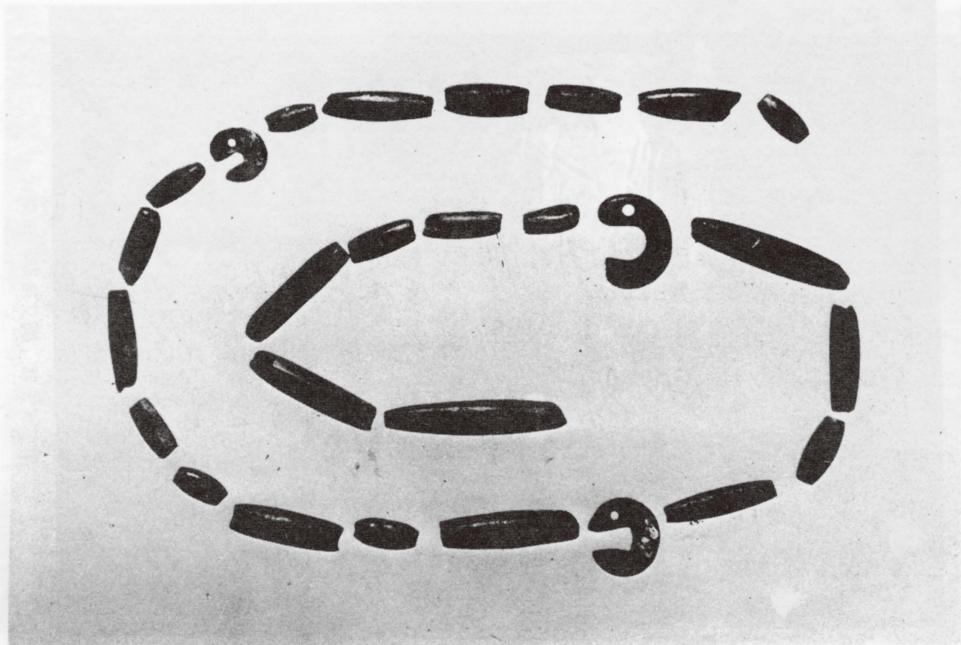
第



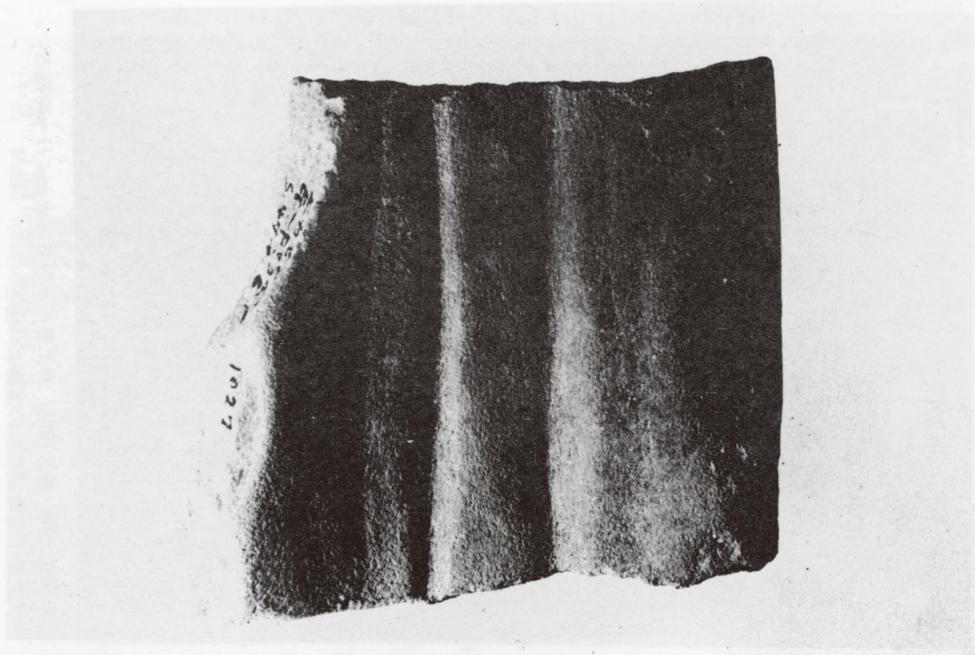
指宿式土器 縄文後期、市来式

市来式土器 縄文後期、鹿児島市草野貝塚出土より一時期古い。  
鹿児島市玉童高校前の道路より出土

## 第 6 図



ヒスイ玉 縄文晚期 加世田市上加世田遺跡出土、管玉を主とし  
勾玉・小玉が出土している。



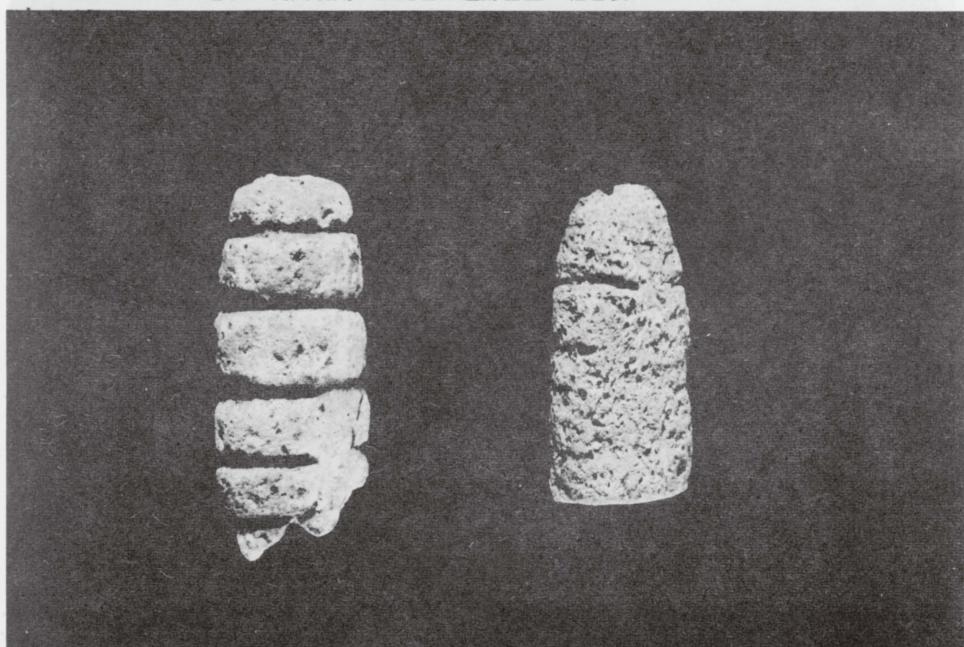
ヒスイの玉を磨いた砥石、砂岩製

## 第 7 図



左 土偶 繩文晚期 上加世田遺跡出土 鹿児島県でははじめての  
出土例である。

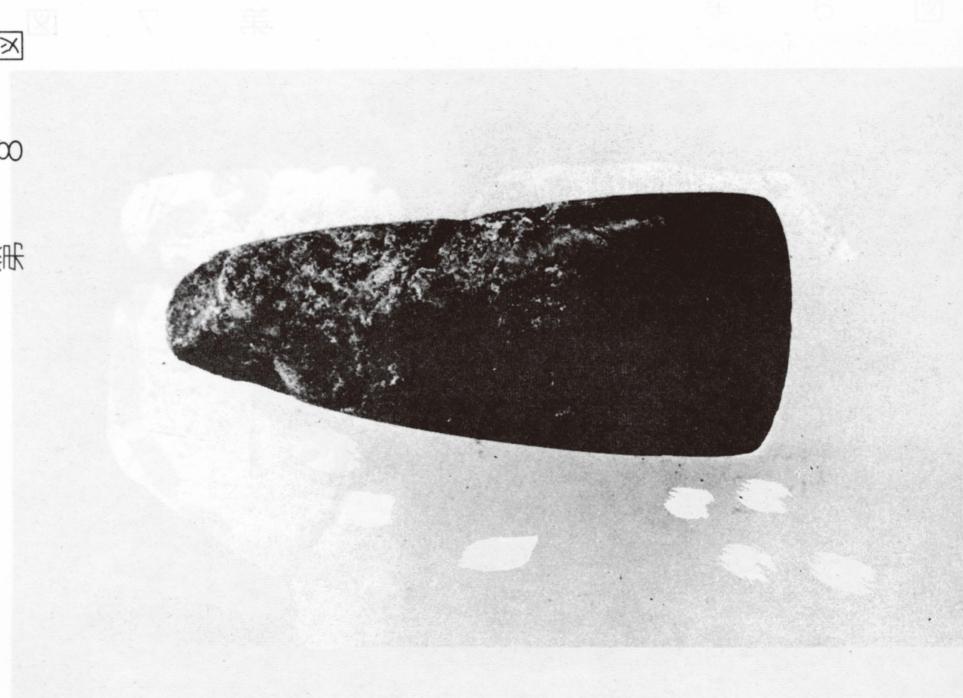
右 岩板 繩文晚期 上加世田遺跡出土 軽石製



石棒 繩文晚期 上加世田遺跡出土ともに軽石製

8

第



ヒスイ製 石斧 上加世田遺跡出土



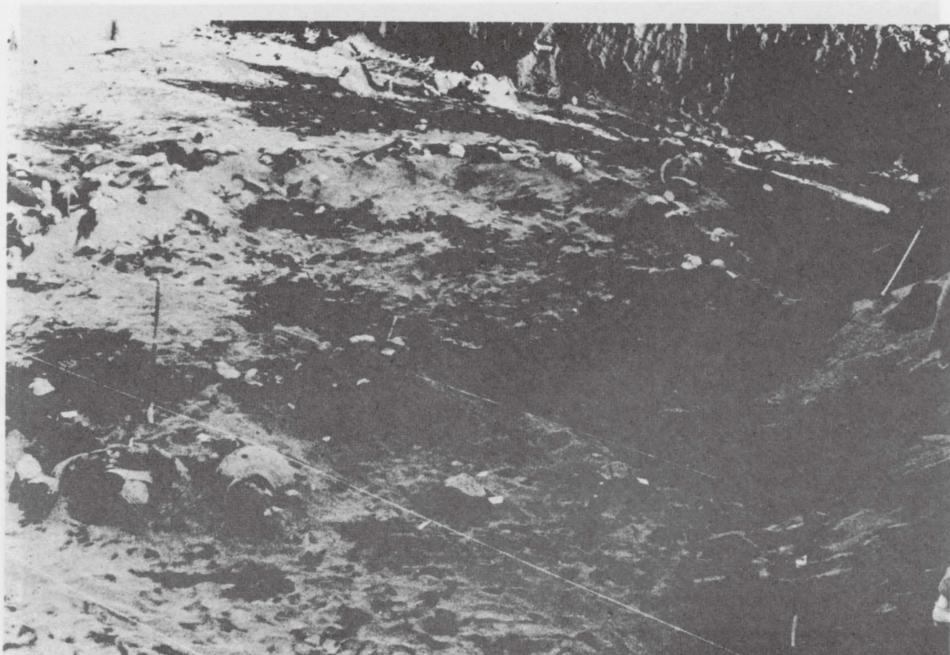
岩偶 繩文晚期 上加世田遺跡出土 磚石製

磚石説より土田易武士 調査文書 第6号

## 第 9 図



山口式土器 弥生中期 大根占町山ノ口遺跡出土 壺形土器



山口遺跡 弥生中期 大根占町山ノ口遺跡出土 壺形土器  
軽石礫を用いた径3mの環状配石、周囲に完成土器が配置されていた。

図

10

第

図 彙

鹿児島考古  
第6号  
図10  
第132頁

山ノ口遺跡出土  
弥生中期 岩偶  
聖石製

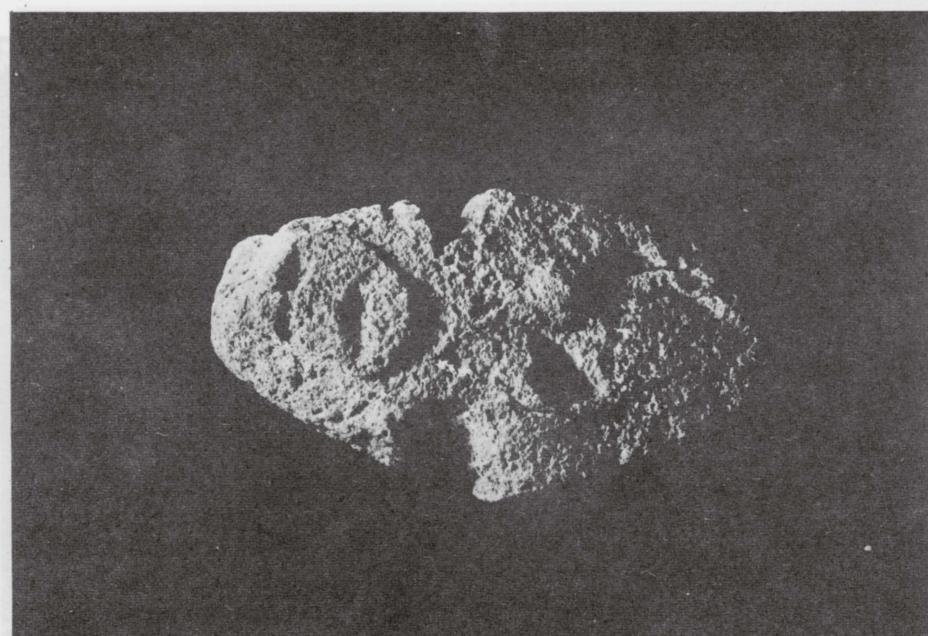
鹿児島考古  
第6号  
図10  
第132頁

圖 21 番

第 11 図

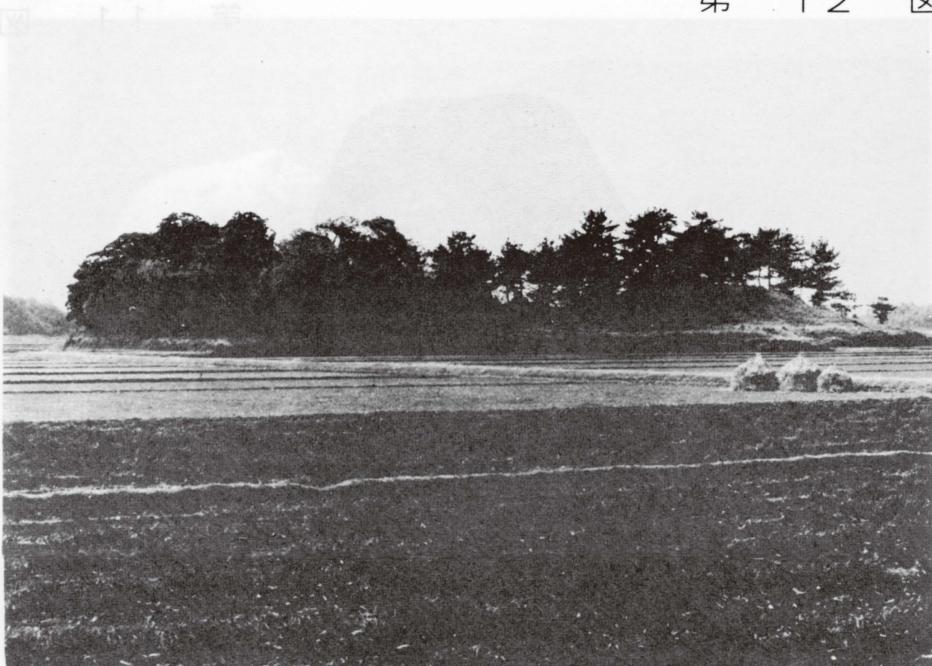


石棒 弥生中期 山ノ口遺跡出土 軽石製



土器の出土状況 山ノ口遺跡 環状配石の周りから出土

## 第 12 図



横瀬古墳 前方後円墳 5世紀後半 大崎町横瀬 本県で最も美しい古墳



天子丘古墳石棺 5世紀後半 後円部中央より出土 日光鏡・獸帶鏡・獸帶鏡劍・刀出土 大崎町神領古墳群の1つ

図 41 築

第 13 図



地下式板石積石室 5世紀後半 高尾野町堂前出土 板石で葺かれた状況



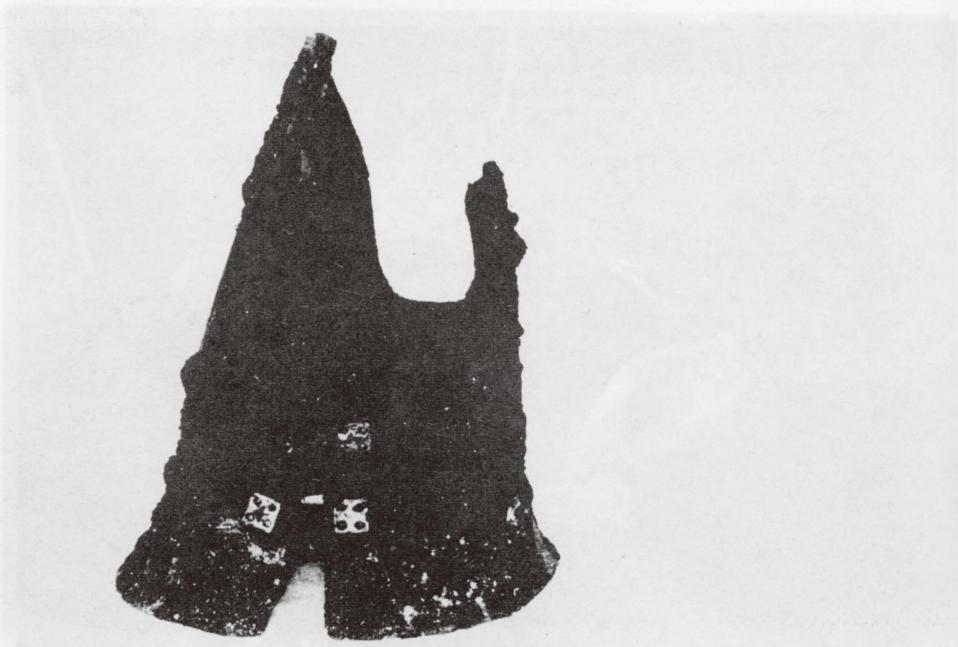
地下式板石積石室 葺石を除いた下から石室が出土した円形である。剣・鎌を出土した。

図 81 葉

第 14 図



衡角付かぶと 5世紀 鹿屋市祓川 地下式横穴出土



短甲 5世紀 鹿屋市祓川 横穴より出土

## 第 15 図

器土壙鏡の出土遺物集の中置日光鏡



獸帶鏡 大崎町神領天子丘古墳より出土

日光鏡 大崎町神領天子丘古墳より出土



蕨手刀 8世紀 高山町横間 地下式横穴より出土

組合せ石棺 5世紀～6世紀 高山町前田 地下式横穴より出土  
内面赤く塗られている。